彼女の生き方 ～Five Stories～（前編）

あまんずのダイアローグ 12

その日は朝から大雨だった。都心に向かう沿線で倒木発生とのアナウンスが耳に入る。不安定な気象状況にもかかわらず、私の足取りは軽かった。なぜなら、会いたい人に会えるから。

待ち合わせ場所に着くと、すぐに友人も到着。「お久し振り！この前は、大雪で会えなかったんだよね」と彼女は開口一番に言った。記憶が蘇った。そして取材当日は大雨。何かあるのか？

駅の階段を昇り切り地上に出ると、カメラを構えた報道陣が「その時」を待っていた。気づけば、今回の私たちの対談場所は、某芸能人のスキャンダル事件が起きた現場の近くだった。

「芸能人ではないけれど、波瀾万丈な道を歩む私たちにはもってこいの場所ね」。直感的にそう思った。

そこに集った「彼女」たちは、それぞれの現場で、彼女なりの生き方を模索している。強く、そしてしなやかに生きる「彼女」たちの5つのストーリーに、しばし耳目を傾けていただきたい。

あまんず恵道

僧侶だって女子会！

飯島▼今日は僧籍を持つ女性同士で集まって、今の悩みや考えていること、そして明るい未来への希望などを、気楽におしゃべりしたいと思います。まずは、みなさんの出家の経緯を聞かせてください。

緑川▼まだ在家だった頃、渡米をした際に仏教に興味を持ちました。当時アメリカでは、仏教の考え方や修行が、日常の選択肢の一つとして活きていて、仏教には生きている人のためのテキストがたくさんあることに気づきました。だから日本に戻ったら日本語で仏教をきちんと学びたいと思いました。でも直ちに僧侶に、とは考えられずに、まずは体と心に良い暮らしをしたいと思って、マクロビオティックや精進料理などを学びました。数年後にご縁があって天台宗で得度し、本山での基本の行を満行して正式に僧侶となりました。その頃は結婚もしていたんですけれど、仏道と家庭との両立はうまくいかなくて結局は離婚しました。

三須▼私は在家出身で、今のところは得度を受けただけです。たまたま宗立の中学校に通い、先生とお話をする中で、仏教が単なる概念ではなく、日常生活の中で物事を見る視野を広げるものだと教わり、純粋に面白いと感じました。駒澤大学に進学してからの学びも楽しくって、卒業を前に、日々にまぎれて自分の中にある仏教的な素養や感性が薄れていくのではないかと恐くなり、結果として得度に到りました。

市橋▼私はお寺出身です。住職である父親が「娘に寺を継がせるなんてとんでもない」と考えていたので、私自身は仏教とは無縁で育ち、20代の初めにデザイナーとしてのスキルアップのために渡仏しました。フランスでは仏教が魅力的な文化と捉えられていました。が、フランス人から仏教について質問をされても、私にはうまく答えることが出来なかったんです。帰国して改めて実家のお寺に関心を向け、単に建築物として観ても、意外に良いな…という軽い気持ちが得度のきっかけです。でも、改めて勉強してみると仏教は深く、面白く、飽きなかったんです。

高丘▼私はお寺の三女ですが、跡取りとして育てられました。

緑川明世（みどりかわみょうせい）

天台宗僧侶。東京都生まれ。深大寺（東京都調布市）職員。国際仏教婦人会（ILAB）役員。『女性と仏教 関東ネットワーク』会員。精進料理やマクロビオティックを学び、1988年に得度。2001年から，毎年南インドに再建されているチベット仏教僧院『デプン寺ゴマン学堂』に短期滞在しながら経典を学んでいる。共著に『ジェンダーイコールな仏教をめざして』（女性と仏教 東海・関東ネットワーク編 朱鷺書房）。

市橋俊水（いちはししゅんすい）

真言宗豊山派僧侶。東京都生まれ。一児の母。都内の『よみうりカルチャー（読売・日本テレビ文化センター）』で仏教関連の講座を3つ担当。元グラフィックデザイナー。